

教授 初田隆 Takashi HATSUDA

初田隆ホームページ <http://hatsuda.jimdo.com/?logout=1>

研究者総覧 <http://hute-rd.hyogo-u.ac.jp/profile/ja.1tZcOCWTvtCg8.b2KdcF8Q==.html>

絵画制作の楽しさを伝えること

“誰でも、楽しく絵をかくことができる”と、私は考えています。誰でも自由に絵を描くこと。こんなことは当たり前のようですが、なかなかそうはいきません。私は絵が下手だと思い込んでいたり、うまく描かないと恥ずかしいと尻込みをしていたり、場合によっては、絵を描くことに何の意味があるの、と思っている人もいます。しかし、幼児からお年寄りまで、どんな人にも、絵を描くことの楽しさ、豊かさをわかりやすく伝えることはできるのではないかと、そのためのプログラムを開発することが自分の仕事ではないかと、私は考えているのです。

そこで、想像力や発想力を高める方法、諸感覚をひらき統合するための方法、造形表現によって自分見つけ、新たな自己を発見するための方法、などに関心を持って、美術教育の研究と指導を進めています。



初田研究室ゼミの様子

美術（教育）を楽しむ

左の三枚の絵、いずれも子どもの落書きのようですが、確かに一枚は子どもの落書き（1歳4ヶ月）です。もう一枚は画家の絵（サイ・トゥオンポリー）、後の1枚はコンゴという名前のチンパンジーが描いた絵です。それぞれの作者を当ててみてください。

人とチンパンジーでは、とてもよく似た表現の段階を経るものの、シンボルやイメージを操作して絵画の世界を形成していくのは人類ならではの特質であるといえそうです。一方、絵画表現の意味や可能性を突き詰めていき児童画や幼児画に酷似した画風を生み出す作家は少なくありません。ご存じのように、ピカソもその一人です。彼は晩年「私は一生をかけて子どものような作品を描こうとしてきた」といった意味の言葉を残していますが、子どもの絵画表現は美術の価値観を揺るがすほどの豊かさを持っているといえるのかもしれない。

さてこのように、チンパンジー、幼児、画家の作品が、結果としてとてもよく似た現れをすることがあるということに、「美術」の不思議さ、面白さを感じずにはいられません。私たちのゼミでは、この不思議で、魅力的な「美術」の世界を、制作や美術教育の研究を通して楽しんでいます。

答え A: サイトゥオンポリー B: コンゴ C: 幼児（1歳4か月）

自分の感受性ぐらい

—自分の感受性ぐらい 自分で守れ ばかものよ—
茨木のり子の詩の一部です。

現代社会では、いろいろとあって、年齢や立場に関わらず、“感受性が磨耗する”と、しばしば感じるどころです。いい音楽を聴く、絵を観るなど、芸術と関わりながら、自分の感受性をいつも高める努力をしていきたいものです。

しかし一方で、子どもたちの感受性はどうか？ 子どもの感性にかかわる様々な問題が喧伝されている昨今、子どもたちに対して、「自分の感受性は自分で守れ」と突き放すことはできません。子どもたちの感受性を守り育てていくのは、身近な大人、それは親や教師、そしてほかならぬ“あなた”だということをお忘れ下さい。子どもの感受性を守り育てることのできる教員に育ってほしいと願っています。